

学級担任が進める小学校英会話活動

—地域イントラネットを活用した多様な活動—

共同研究

代表者：福岡県／大牟田市立明治小学校 校長 安田 昌則

概要

本研究は、大牟田市教育委員会が作成している地域イントラネットを活用して小学校の学級担任が中心となって英会話活動の多様な活動を進めていった実践報告である。研究内容は、英会話活動の授業用コンテンツを活用したものとテレビ会議システムを活用したものである。小学校英会話活動は、ややもすれば学級担任よりも英会話活動担当教師や ALT などを中心になって進められていることが多く見受けられる。本市の小学校英会話活動は、学級担任が指導することになっている。そこで、小学校で英会話活動を推進するにあたり、本市の地域イントラネットを活用して、学級担任が意欲を持ち、自信を持って進めることのできる英会話活動について研究を行った。

1 はじめに

1.1 小学校英語の課題

大牟田市における小学校英会話活動は、原則として学級担任が指導することになっている。それは、小学校で英会話活動を推進するにあたり、子供の気持ちや考えなどを一番理解しているのは学級担任であり、学級担任が指導してこそ初めて触れる外国語に対して、子供の意欲・理解・態度などの子供の実態に応じながら学習を進められると考えられるからである。しかし、英語が得意な小学校の学級担任はそう多くはいない。「学習や活動の過程をどうすればよいのか」、「自分の発音でいいのか」など不安や疑問を抱く学級担任も多い。

そこで、本市の地域イントラネットを活用して、学級担任が意欲を持ち、自信を持って進めることのできる英会話活動について研究を行うことにした。

そして、具体的な活動・学習内容や発音の課題も本研究によって明らかになり、充実した小学校の英会話活動を少しでも進めることができると考える。

1.2 大牟田市の取り組みの経過

本市では、特色ある教育活動の1つとして平成12年度より、市内全24小学校の6年生で英会話活動を「総合的な学習の時間」などを活用して、年間35時間程度を実施することになった。現在は全小学校の6年生で35時間、1～2年生は10時間、3～4年生は15時間、5年生は20時間程度取り組んでいる（平成18年度より第3学年以上で年間35時間実施）。

本市の小学校は、英会話活動に関して、教育特区でもなければ、研究開発学校を有しているという特別な環境でもなく、通常の公立小学校である。公立小学校における英会話活動をどのように取り組んでいくのか、特に、本市では、小学校の担任などを中心にした英会話活動を推進している。

小学校で英会話活動を導入する際、だれが、どんな内容を、どのように指導するのが課題として挙げられた。そこで、本市では小学校の担任などを中心に行うことにした。それは、英会話活動という新しい学習を行う際、子供の不安をなくし、スムーズな学習を展開するためには、一日中子供と共に過ごし、子供一人一人の実態をよく理解し、常に学級全体の子供に目を配っている学級担任が授業を進めることで、効果も上がると考えたからである。

そこで、指導体制として、平成12年度は小学校の先生方の中で、英語の免許を持っているか英語が堪能な先生方を ECT（English Conversation Teacher）に指名し、学級担任と ECT の TT や学級担任が単独で行うなど、多様な指導体制をとった。

現在では、学級担任が中心となり、時々 ALT や

LGT（Language Guest Teacher）などの外国人講師の支援を受け、英会話の授業を進めている。

また、これまでに、学級担任の英語の発音と具体的な学習の展開といった指導力向上のために、市教育委員会が発音練習用のテープ・CD などを作成したり、授業研修会を開催し、授業の進め方や英会話について参観し協議会を設けたり、英会話活動入門講座・英会話活動継続研修会・英会話研修会などを設定したりと、教職員のニーズに応じた支援を行ってきている。

2 研究の視点

2.1 学級担任中心の指導体制

本市では、『英会話活動』は、原則として学級担任が指導することになっている。学級担任の役割として次の4点がある。

- ① 子供の実態を把握し、指導計画を立てる。
- ② 活動中は、学習者の代表として子供と一緒に活動をする。
- ③ 英語でコミュニケーションを楽しむモデルとなる。
- ④ ゲームなどの活動が、楽しくスムーズに行える学級作りをする。

学級担任は、上記の4点に留意しながら活動を行うわけであるが、これまでの活動内容に工夫改善を加え、自信を持って積極的に指導できるように、地域イントラネットの授業用コンテンツやテレビ会議システムを有効活用していくことを通して、多様な活動をめざしていく。

2.2 地域イントラネットを活用した指導方法

本市においては、教育用イントラネットが整備されており、Web サーバーやDB サーバー、ストリーミングサーバーを備える「情報センター」を中心に、市内の小・中・養護学校（36校）や社会教育施設の計61施設を100Mbpsの光ケーブルで結んでいる。各学校内も100Mbpsの校内LANで各教室が結ばれており、すべての普通教室にパソコンが整備されている。また、光速回線を活用したテレビ会議も可能である。このような地域イントラネットを活用すれば、多様な英会話活動を展開できると考える。

また、平成14年度には、このイントラネットを活用した英会話活動ができるように、コンテンツを作成した。このコンテンツは、1時間ごとの授業展開案に活動の様子やNative Speakerの会話などの動画もあわせた内容で、わかりやすくしかも使いやすい内容にしてある。また、Native Speakerの発音による1,600の単語・フレーズ集を収録しており、教室やコンピュータ室でも見ることができ、いつでも活用することができる。

この地域イントラネットのコンテンツを学級担任が有効的に活用することにより、多様な活動を推進していく。

3 研究の実際

3.1 指導の考え方

大牟田市における小学校英会話活動について、次のように考えられている。

3.1.1 基本的な考え方

- ① 遊びやゲームなどの体験的な活動、交流活動などを通して、英会話に「慣れる」、「親しむ」、「楽しむ」活動を行う。
- ② 国際理解教育の一環として行うもので、中学校の外国語教育（英語）の前倒しにならないように配慮する。
- ③ 各学校の実態に応じた学習計画の下で、各学校で工夫しながら行う。

あくまでも、英語嫌いを出さずに、英会話に慣れ・親しみ・楽しむように活動を工夫して取り組む。

3.1.2 英会話活動の基本方針

- ① 子供と教師が共に楽しめる活動とする。
 - 歌・ゲーム・スキット（劇）・あいさつなど、子供たちが興味を持って取り組める活動とする。
 - 子供の実態や興味関心に応じて選べる活動とする。
 - 英語に初めて触れる子供たちでも抵抗なく取り組める活動とする。
- ② 「聞く・話す」を基本の活動とする。
 - 文字を用いての読む・書く活動は重視しない。
 - 文法、発音、イントネーション、アクセントなどについては柔軟に対応する。

- 英語で相手に自分の意志を伝えるために、会話だけでなく、身振り、手振り、動作など身体的表現手段を用いて表現させる。
- ③ コミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を大切にする。
- 楽しく活動する中で、自然に無理なく英語を話し、できるだけ英語に親しむようにする。
- 小学生なので、「聞く・話す」ことを基本として、コミュニケーションを図ろうとする意欲を大切にす。また、何よりも子供と教師が楽しむ活動となるようにする。

3.1.3 指導に当たっての配慮事項

- ① 全員が参加できるよう、活動や体験を多く取り入れられる。
- ② 毎時間、どの子供も1回は発表できる機会を与える。
- ③ 苦手意識のある子供は、しっかり褒める。
- ④ 英語の雰囲気にならせるため、簡単な指示や褒め言葉は英語で伝えるようにする。
- ⑤ 繰り返し指導する中で、自然に英語に親しませていく。(無理に覚えさせるようなことはしない)
- ⑥ 音楽を通して、英語の音とリズムに慣れさせる。
- ⑦ 視聴覚教材や教具の有効活用を図る。
(テレビの英語番組やビデオ教材、歌のCDやカセット、絵や写真、実物・自作のものなど、視聴覚教材や教具を有効に活用する)
- ⑧ 文字の指導は行わないが、できるだけ目に触れる機会を多くし、自然と英語の文字に慣れ親しませるようにする。(教室環境にも配慮していく)

このように、活動や体験を多く取り入れ、繰り返しの中で英語に慣れ親しむようにしている。

3.2 学習活動展開案の作成

本市では、平成12年度の英会話活動の取り組み時より、1年間の実践事例をまとめた「小学校英会話活動実践事例集」を本研究会を中心として作成してきた。そして、これまでの数多くの実践をもとに、子供の発達段階と学習経験年数に応じた題材・活動内容・使用する言語材料の選定、各学年の年間活動計画の系統的配列、1単位時間の内容(構成)などの点から見直し、より communicative な活動が展開できるように工夫・改善してきている。そこで、地域イントラネットのコンテンツを積極的に活用し

た「小学校英会話活動実践事例集」を作成すれば、学級担任がより積極的に英会話活動に取り組むことができるとともに、教師・子供にとっても効率的な学習が展開できると考えた。今回、実際に地域イントラネットを随時活用した実践をもとに、「小学校英会話活動実践事例集」(第7集)を作成することができたことで、豊富な実践事例の中から、自分の学校、学級の子供に合った楽しい活動を展開することが期待できる(資料:図10, 図11)。

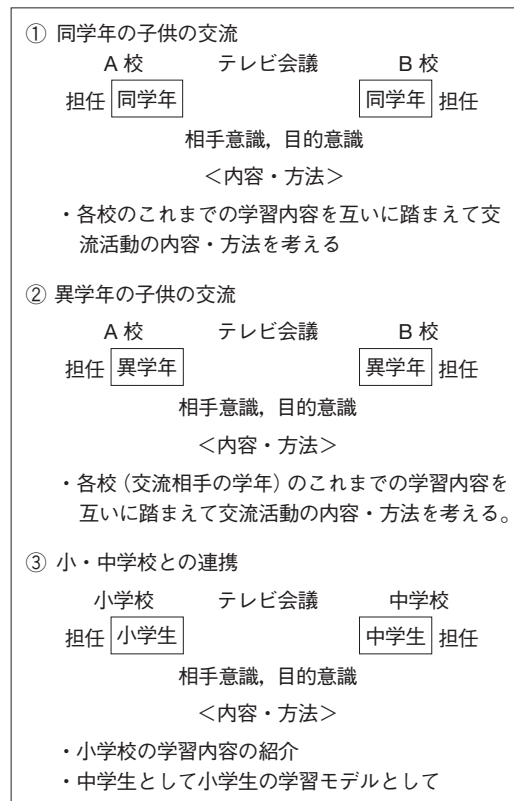
3.3 地域イントラネットの活用の実例

3.3.1 テレビ会議システムの活用

テレビ会議は、他校とテレビを通してリアルタイムで英会話や活動と一緒にいたり、自分たちの活動を紹介し合ったりするものであるが、相手意識、目的意識を持たせ、内容・方法を子供たち自らが考える活動を工夫することで主体的な学びの姿が期待できる。

交流の形態としては、図1に示したように、次の4つが考えられるが、今回は①、②の2つを行ってみた。

▼ 図1：テレビ会議の種類



④ ALT を活用した複数校の指導

A 校 テレビ会議 B 校
担任 該当学年 該当学年 担任
ALT
・ある学校に ALT が訪問し、テレビ会議システムを活用して複数校の子供と学習を行う。

① の授業では、明治小学校と笹原小学校の 6 年生同士が、「Where is the ○○?」という主題で「Information Gap Game」を行った（資料：図12）。同学年ということで、学級担任が各校のこれまでの学習内容を事前の打ち合わせで検討していった。子供たちは、学級だけでの日頃の授業とは違って、実際には会ったことのない学校の友達を相手に交流を行うということで、互いに相手意識、目的意識を持って積極的に取り組み、意欲的に楽しく活動することができた。テレビ会議終了後には、全員の子供がまたテレビ会議をやりたいという感想を述べていた。

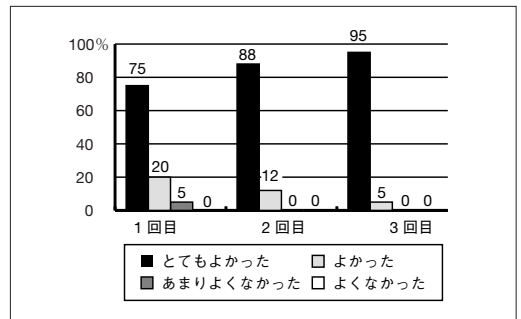
▼ 写真 1：6 年生同士の交流



② の授業では、明治小学校の 6 年生が「3 Hint Game を作ろう」という主題で取り組み、単元の終

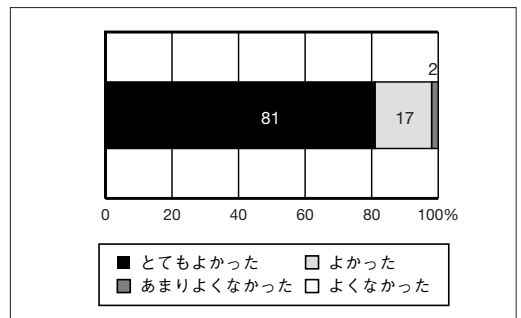
わりの段階で15分間、平原小学校の 4 年生と「3 Hint Game」を行った（資料：図13）。6 年生が 4 年生に質問を出すということで、4 年生にとってわかりやすくなるように、これまでに学習した単語やフレーズを使ったわかりやすいヒントをグループで話し合って考え、ジェスチャーをしながら出していった。4 年生は出されたヒントをもとに答えを推理していたが、適度な難しさとで正解すると大喜びであった。初めてテレビ会議を経験した 4 年生は、始まる前からわくわくした様子で、終了後は、またテレビ会議をしたいとか今度はこちらが問題を出してみたいなどと話していた。

▼ 図 2：テレビ会議はどうでしたか（明治小）
（N：41）



6 年生の子供たちは、回を重ねるにつれてとてもよかったという声が増えている。第 1 回目は初めての経験でやり方がわからないとか知らない相手なので不安だという声があったが、やり方がわかるとテレビ会議の面白さ、楽しさに引かれていって十分に満足していることがわかる。

▼ 図 3：テレビ会議はどうでしたか（平原小）
（N：41）



4年生の子供たちは、やり方がよくわからなかったとかヒントが難しかったという声もあったが、初めての経験ながらテレビ会議の楽しさを味わうことができたようである。こちらからも問題を出せたらもっと楽しむことができたようである。

3.3.2 授業用コンテンツの活用

本市教育委員会は、平成14年度に「小学校英会話活動実践事例集（第2集）」をもとにした授業用コンテンツを本研究会の協力の下で作成した（図4～6）。

このコンテンツは、1時間ごとの授業展開案に活動の様子や Native Speaker の会話などの動画もあわせて内容で、わかりやすくしかも使いやすい内容である。また、Native Speaker の発音による1,600の英単語・フレーズ集も作成している。このコンテンツは、教師用と子供用があり、各教室やコンピュータ室でも見ることができ、いつでも活用することができる。

今回、学級担任が実際の授業の中で、新しいスキットやゲームの仕方をコンテンツの動画を見せる活動を取り入れた授業を随時仕組んでみた。また、学期末や学期初めに2時間程度、コンピュータ室で「小学校英会話活動実践事例集」を開いてこれまでに学習した英単語やフレーズを振り返り発音を確認したり、「英単語・フレーズ」を開いて、知りたい英単語やフレーズを学習する機会を設けた。

このことにより、子供たちは、自分のペースに合わせてこれまでの学習を振り返ったり、自分の興味・関心に沿った学習をすることができた。コンピュータ室で子供たちに自由に発音練習させ、英単語やフレーズの定着を図ることができた。

さらに、これまでの授業展開案71時間分に新たに50時間分を追加し、合計121時間分の実践事例を作成できたことにより、コンテンツの内容の充実を図ることができた。

■ 表：授業用コンテンツの収録時間数

平成14年度版	平成18年度版
	第1学年用…10時間
	第2学年用…10時間
第3学年用…12時間	第3学年用…18時間
第4学年用…12時間	第4学年用…18時間
第5学年用…12時間	第5学年用…22時間
第6学年用…35時間	第6学年用…43時間

▼ 図4：コンテンツの画面（実践事例集編）



【<http://www.ed.city.omuta.fukuoka.jp/english/>】

▼ 図5：コンテンツの画面（実践事例集編・教師用）



▼ 図6：コンテンツの画面（英単語・フレーズ集編）



【<http://www.ed.city.omuta.fukuoka.jp/english-word/>】

3.3.2.1 実践事例集編

① 学級担任

学級担任は、授業の前に教室や家庭でこのコンテ

ンツを開いて教材研究をすることで、具体的な学習内容を把握できるとともに、活動の進め方をイメージすることができた。また、本時に使う言語材料を繰り返し練習することができ、自信を持って授業に臨むことができた。そして、実際の授業で液晶プロジェクターなどを使い、Native Speaker のやり取りやゲームの進め方などについて子供たちに示して授業を進めたり、CD やコンテンツの動画を使わないで学級担任自身が発音のモデルを示すことができるようになった。

② 子供たち

コンテンツの実践事例集編には、子供用の入り口も設けてあり、子供たちが自由にアクセスすることも可能である。子供たちは、雨の日や昼休み時に数人で教室のパソコンに向かい、これまでに学習した英単語やフレーズの発音練習をしていた。また、学期末や学期初めに、コンピュータ室でこれまでに学習したや単元を開いて復習することにより、これまで以上に会話のフレーズの定着することができたとともに、発音もよくできるようになった。

▼写真2：コンピュータ室での発音練習風景①



3.3.2.2 英単語・フレーズ集編

① 学級担任

学級担任は、授業の前に教室や家庭でこのコンテンツを開いて発音練習をすることで、本時にコンテンツを開いて子供たちに Native Speaker の発音の動画を見せなくても、教師自身がスキットの発音を示すことができるようになったり、家庭や学校で興味のあるカテゴリーの英単語の発音練習をしたり、発音に少し自信を持つことができた。

② 子供たち

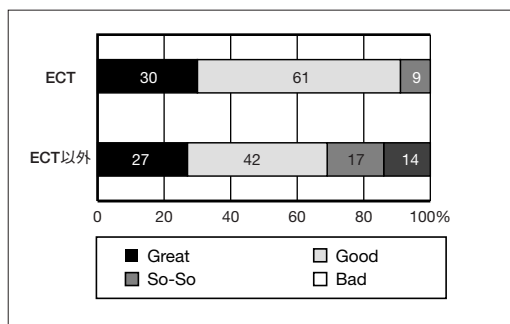
使い方が簡単のため、どの学年の子供でも自由にアクセスすることが可能である。子供たちは、「実践事例集編」同様に、雨の日や昼休み時に数人で教室のパソコンに向かい、これまでに学習した英単語やフレーズの発音練習をしていた。また、学期末や学期初めに、コンピュータ室で、これまでに学習したや単元を開いて復習することにより、これまで以上に会話のフレーズの定着することができたとともに、発音もよくできるようになった。また、家庭でインターネットを通してこのコンテンツにアクセスして発音の練習をしている子供も少なくない。

▼写真3：コンピュータ室での発音練習風景②

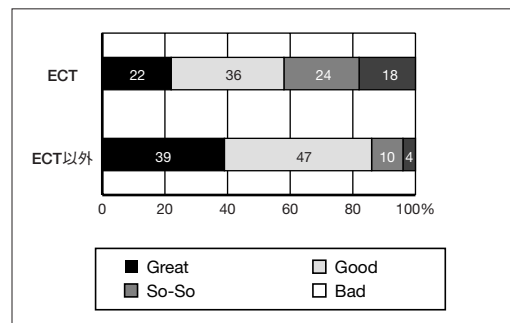


英語に関して少しでも自信がある ECT は、コンテンツを使った教材研究や発音練習をあまりしないが、授業ではコンテンツの動画を見せて Native Speaker の発音に触れさせることが多い（図 7、8）。また、ECT 以外の学級担任は、コンテンツを開いて教材研究や発音練習をすることで、本時にコンテンツをいつも開かなくても教師自身がスキットの発音を示していることから、自信を持って授業に臨んでいることがわかる。コンピュータの画面を大きく映し出せるスクリーンがあれば、コンテンツの動画を見せながら授業をしてみたいという声も少なくなかった。また、コンテンツをもっと簡単に開けるようにしてほしいという声も聞かれた。

▼ 図 7：コンテンツを授業で活用していますか
(N：ECT 33 ECT 以外72)



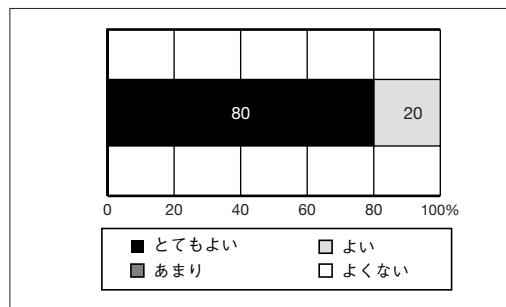
▼ 図 8：コンテンツを教材研究や発音練習に活用していますか (N：ECT 33 ECT 以外72)



子供たちは、教室のパソコンで好きな時間に自由にアクセスできる上、使い方も簡単のため重宝しているようである。1,600もの英単語やフレーズが収録してあることや知りたい英単語やフレーズをすぐに聞けること、何度も繰り返し練習できることや画像があることで口元の動きをまねしながら発音練習で

きることなどがその要因のようである（図 9）。

▼ 図 9：コンテンツを使ってみたいと思いますか
(N：128)



4 成果と課題

英会話活動の授業展開の中で、地域イントラネットを活用していくことで、以下の成果を得ることができた。

- (1) 学級担任による数多くの実践をまとめた実践事例集や地域イントラネットの授業コンテンツの作成及び改善を重ねてきたことにより、授業コンテンツを効率的に活用することで、学級担任が単独で指導するということに対する不安も徐々に解消されてきた。
- (2) テレビ会議システムによる英会話活動の交流会なども積極的に行われるようになり、学級担任による英会話活動の質の高まりと内容の充実や多様な活動の広がりが実感されるようになってきた。また、テレビ会議を行う時のノウハウも蓄積され、徐々に質の高い交流が行われるようになった。
- (3) テレビ会議システムによる英会話活動の交流会は、交流相手が同学年であろうと異学年であろうと、子供が常に相手意識・目的意識を持って活動に臨むことができるため、子供が積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲や熱意を感じることができる活動であることが教師のみならず子供にも認識された。

今後克服していかなければならない課題は、次の 2 点である。

- (1) 本市の「小学校英会話活動実践事例集」は、子供

の発達段階と学習経験年数に応じた題材・活動内容・使用する言語材料の選定、各学年の年間活動計画の系統的配列、1単位時間の内容（構成）などの点から見直し、より communicative な活動が展開できるように工夫・改善し、年度ごとに新しく改訂しているので、授業コンテンツもそれらに合わせて改訂していく必要がある。

- (2) テレビ会議システムの活用で、小学校と中学校との交流や ALT を活用した複数校の実践研究を現時点では行ってはいないので、早期に実施して実践を積み重ねていくことにより、交流の仕方のノウハウを蓄積し、英会話活動のさらなる活動の広がりと充実を図っていきたい。

5 | 終わりに

文部科学省の「小学校英語活動実施状況調査（平成17年度）」によると、全国の公立小学校の93.6%が英語活動を実施しており、英語活動の主たる指導者は、各学年とも、「学級担任」が最も多く、いずれも9割を超えている。また、英語活動への ALT（外国語指導助手）の参加割合は各学年とも6割を超えている。2006年3月27日、小学校段階の英語教育について検討してきた中央教育審議会外国語専門部会は、全国一律に小学校で英語を実施する「必修化」を提

言する審議経過をまとめた。それによると、5、6年生で週1時間程度、共通の教育内容を学習することでコミュニケーション能力の育成を重視するとした。また、指導者としては、当面は学級担任と ALT や英語が堪能な地域人材などとの Team Teaching を基本とするとした。さらに、ICT（Information & Communication Technology）の積極的な利活用を提言した。

この提言により数年後には全国の小学校で英語活動が完全実施されるだろうが、全国の市町村で十分な数の ALT を雇用することは数的にも財政的にも無理があるし、学級担任が指導するにしても早期準備をしておかなければすぐに実施できるものではないことは周知のとおりである。このような情勢の中、大牟田市のこれまでの取り組みは、これらの面から見ても大変価値のあるものであると考える。

謝 辞

末筆になりましたが、このような貴重な研究の機会を与えてくださいました（財）日本英語検定協会と研究助成選考委員の先生方に心より感謝申し上げます。また、アンケート調査に協力していただいた市内の小学校の先生方や明治小学校、笹原小学校、上内小学校、平原小学校の皆さんに心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 松川禮子.(2004).『明日の小学校英語教育を拓く』. 東京：アプリコット.
文部科学省.(2001).『小学校英語活動実践の手引き』. 東京：開隆堂.

- 吉田研作.(2003).『新しい英語教育へのチャレンジ—小学校から英語を教えるために—』. 東京：くもん出版.

▼ 図10：英会話活動案の使い方

[illegible]

▼ 図12：第6学年英会話活動案

[illegible]

▼図11：第6学年1組英会話活動案①

[illegible]

▼ 図13：第6学年1組英会話活動案②

[illegible]